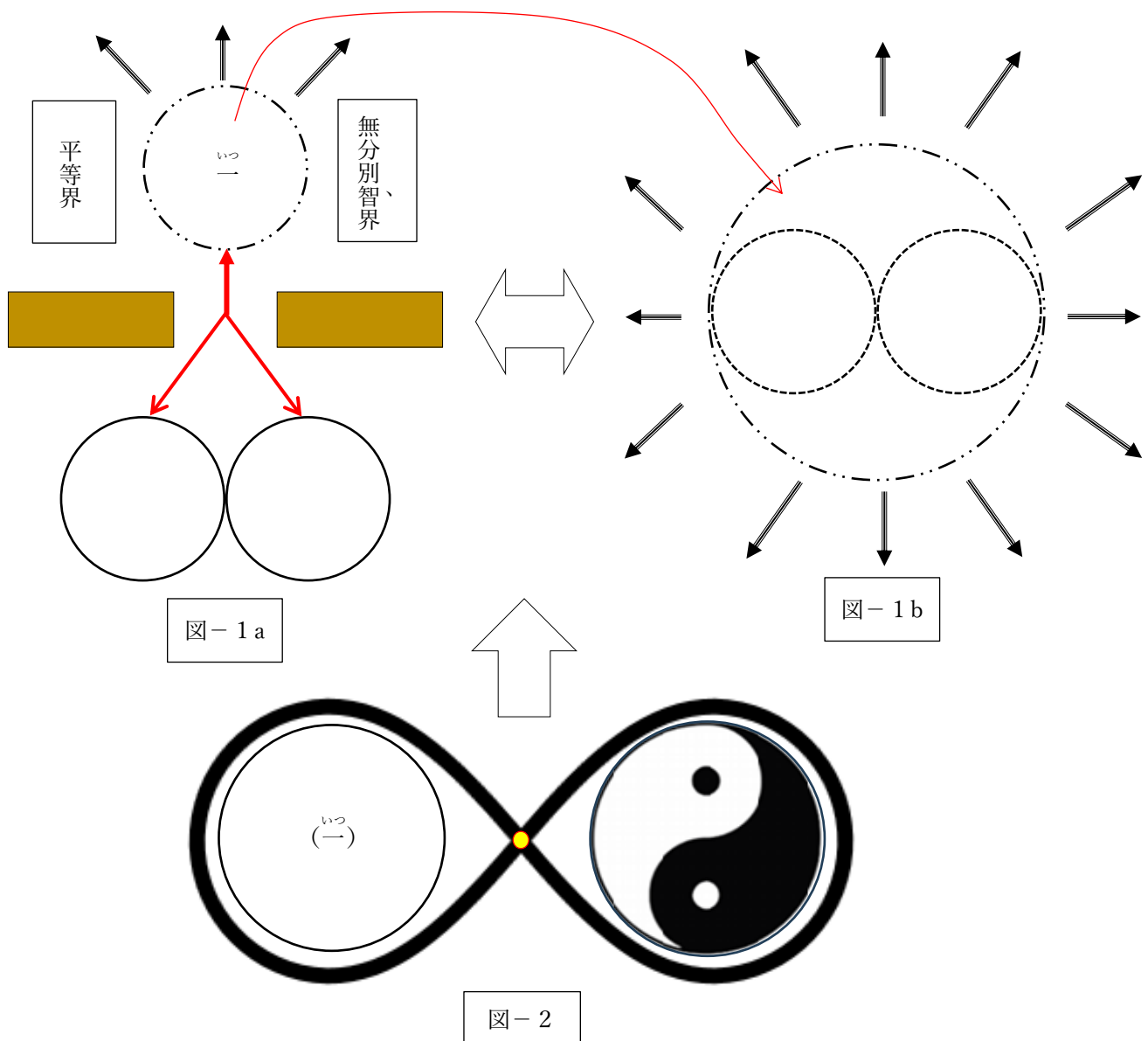


華嚴の世界に通じること。「**※維摩経**」は聖徳太子によって日本で初めて解説された仏典の一つである。
 (※) 同経が成立したのは西暦紀元前後の頃、出家者を中心にした厳しい修行が中心になっていた時代の中、リベラルな在家仏教者達が一大仏教変革ムーブメントを巻き起こした世情における「大乘仏教」運動の中で、ある在家信者が纏めたもの。

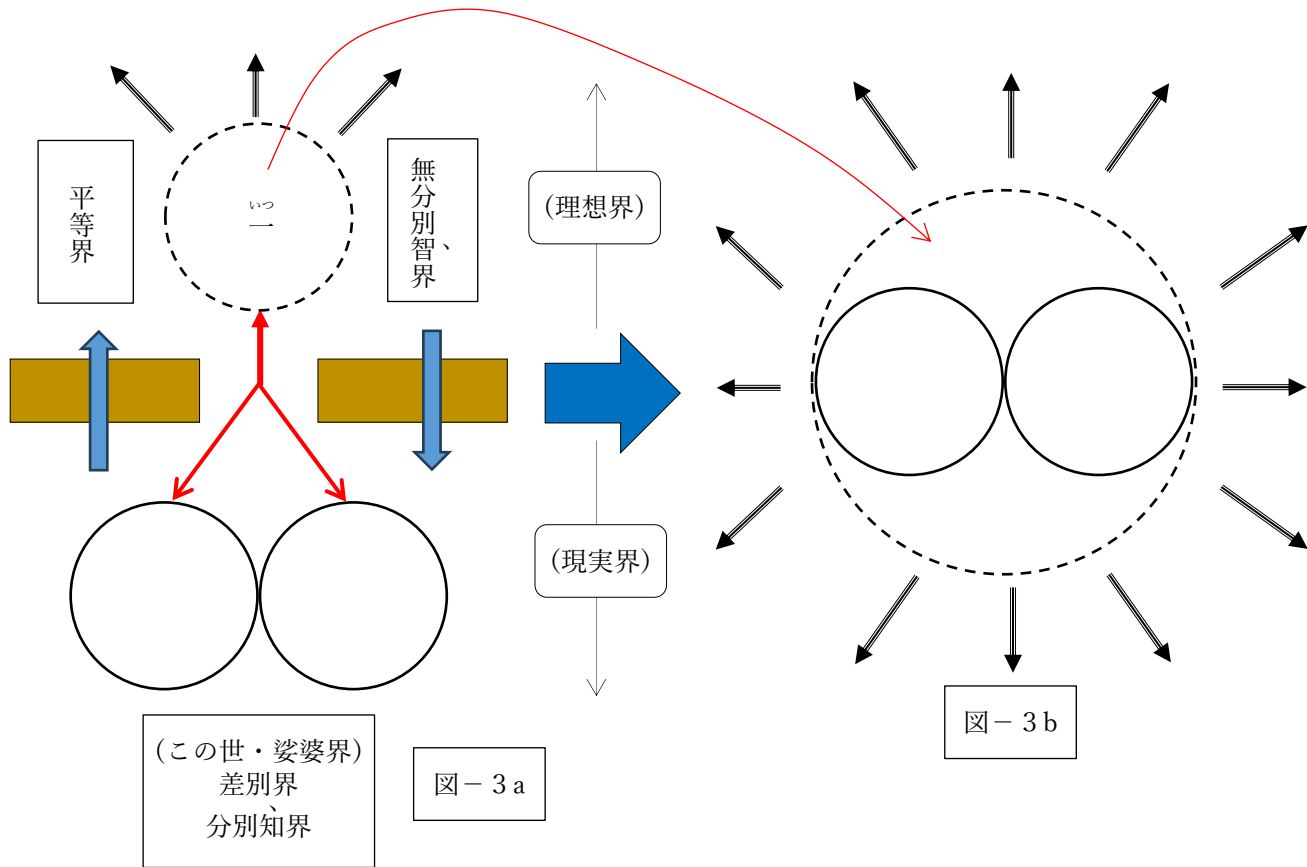
(図-1・図-2)「不二^{ふに}」とは、二つのものの相対的対立(二項対立)を超えた二者の絶対的平等を意味する、差別^{しゃべつ}の二者を容認しつつ相対の矛盾のない和合・融合を説くところに力点を置いている。したがって、簡単に記述すれば、「不二の法門」とは、大乘仏教経典「維摩経」に由来し、その「不二^{ふに}」の思想を根底に置いた哲学(経)である。言い換えると「相反する概念は本(源)を糺せば別々のものではなく、一つのものの部分である」と説くものである。

別記したとおりの、陰陽相対(待)性二元原理、分別知と無分別智、差別界(相)と平等界(相)、華嚴の世界、根源を辿れば「空」を説く仏教にみな通じる考え方である。**お互いが思想信条、生き方の総てが「違う人・異なる者」の間柄において、お互いが異質性を丸々認め合うことこそに共存共栄を齎し、そして、共生社会に見えざる力で貢献することになると思う。**

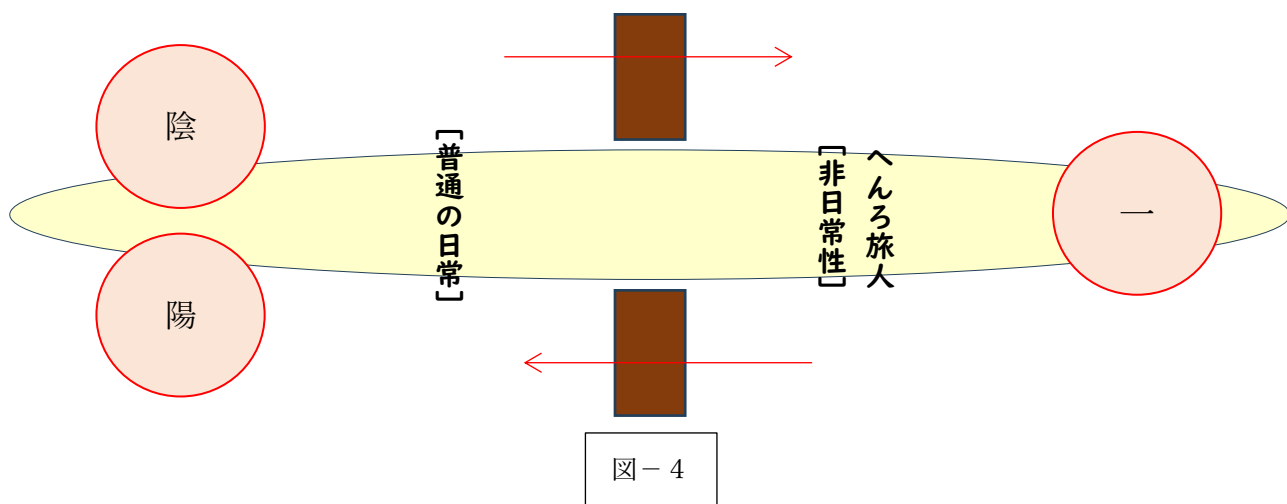


図－１・２にもう少し解説を加える。図－１bは、陰陽二元要素と「一」の統合体をイメージしたもの、^{いつ}相対(待)性二元対立が消えた世界を表す。図－２はその過程を横イメージしたものである。

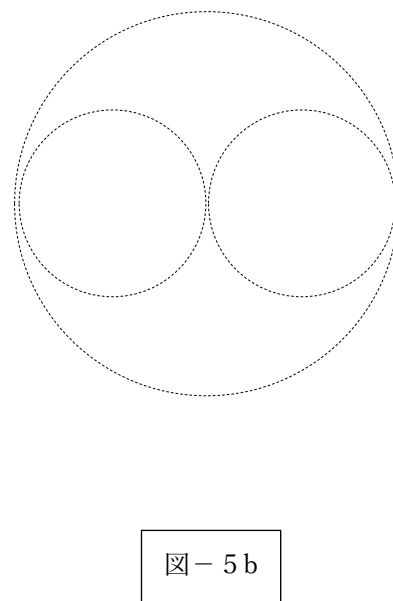
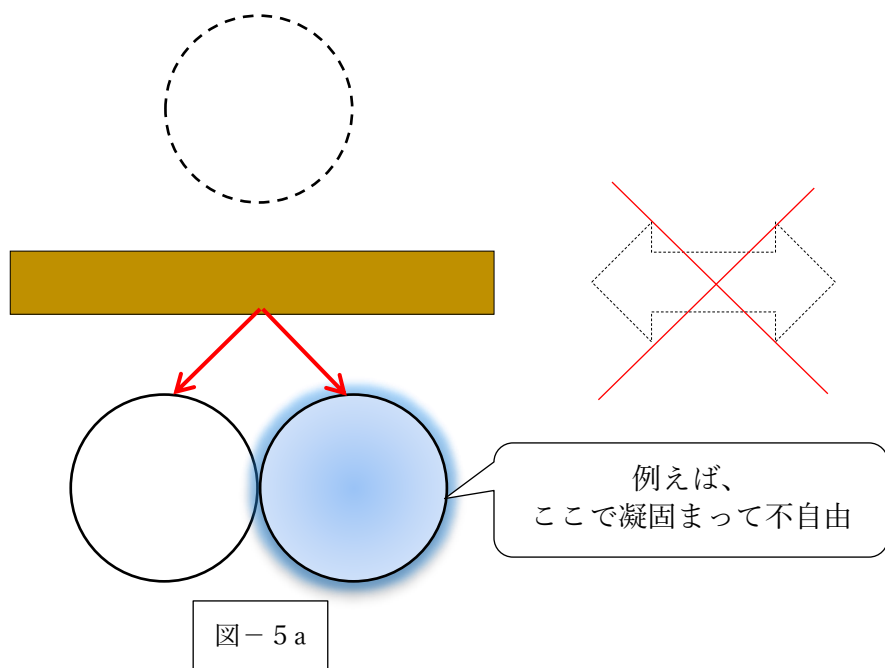
華厳哲学は、「不二の法門」概念を理論・理屈で留めずに、二項対立の現実社会（この世・娑婆界／差別界・分別知界）と、その個別境界が外れた・消えた理想界（平等界・無分別智界）を自在に往復・往来する実践的思想をいう。極簡単に言うと、生身の人間社会において、現実と理想を常に一致させるように最善の努力を払え、そのことに不惜身命の情熱と使命感を傾注せよという厳命があるとする。また、天命はそれを可能ならしめるという考え方である、事事無碍法界ともいう。そのイメージが図－**3**のとおりである。



私は4回目の四国霊場歩きへんろを――2024（令和6）年春／75歳において実施したが、その時の心模様は、前記したことと通底する図－**4**のとおりであった。



さて、ここで、世間一般に言われる信念の言葉のこと、“俺の信念は固い、動かぬ信念、ぶれない信念、揺るぎない信念”と言われる。そのものの意図する心情は、二項対立世界のどちらか一方の極に凝り固まっている証拠なのである。図－5aのとおり例えば、そこに凝固まって不自由を来たしている、自作のバリア・ベールで自らを包んでラミネートし、剥がれないようにしているも同然なのだ、しかし、本人はそのことを絶対に気付かないのだ。思想信条がどこか・何かの極に偏って固執している、硬直・停滞していると、「不二の法門」は閉ざされることから、^{いつ}「一」の世界、すなわち、いきがい感や充実感が蓄蔵されている真の自己、理想精神の欲求や良心・致良知の心に辿り着くことは出来ない。



「華嚴世界」が教える「もの・こと」の森羅万象は、総ての個体の縁起による集合体、すなわち、**相互関連性・相依相関ネットワーク（縁起）**の賜物だという、このことから、今この瞬間は留まることを知らずして、自分を取り巻く環境は時々刻々変化・変容しているのである。自分を取り巻く環境・条件・シチュエーションが時々刻々変化している中のある一点で、“俺の信念は〇〇だ”と世に周囲に、宣言・宣誓した処で、旧態依然と“俺の信念は〇〇だ”と叫んだ処で、何の意味を為すのか、真の共感は生まれるのか、周辺事情が変われば変わったで、そこに適切な信念と称する決意、行動意欲が表明されなければ、共感も共生の協調も生まれる訳が無いのだ。いくらテーマ・命題は同じであろうが、相手が変われば、場所が変われば、その課題解決のための考え方や方策は自ずと変わるだろう。

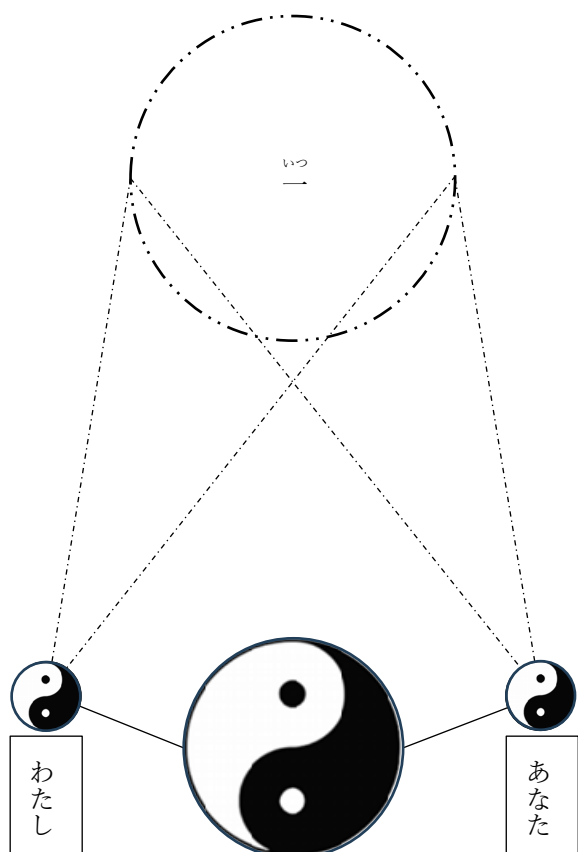
したがって、私のいう信念とは、「TPO・時処位に即応の最適解」を見出す心・言・行、つまり、最適解を求める実践的な「心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」を言うものだと思っている。

鈴木大拙著「日本人の霊性」（角川ソフィア文庫）P389に図(表)－6のとおり含蓄の深いフレーズがある。

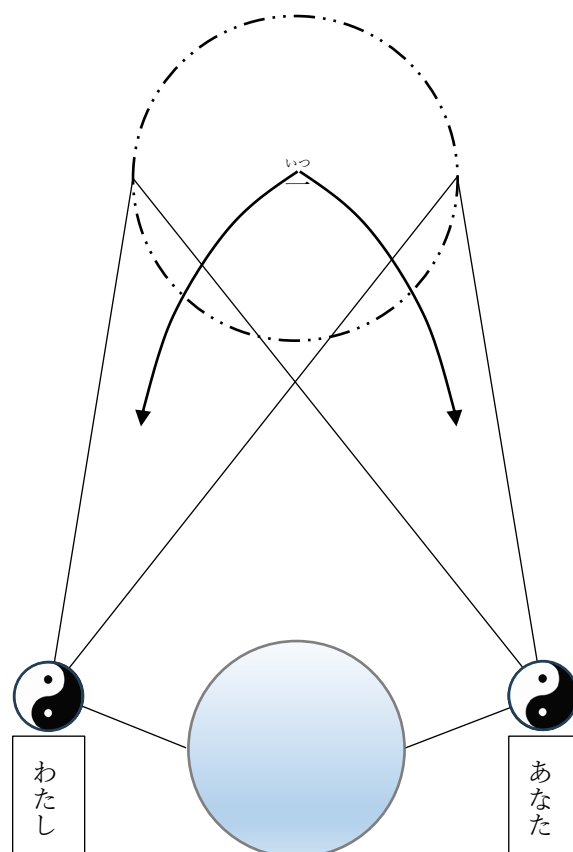
禅の生き方は、（一つのもの・ことに対して）いつも一方に肯定をおき、また、一方に否定をおく。その二つは絶対的に矛盾する。それをそのままにしておく、否定にも依らず、肯定にも依らない。そしてそこで一句を言えと、迫って来るのである。この一句が絶対の一句である。

図(表)－6

前記を発展的に別の切り口で展開する。図－7 a は現実の向き合い、私とあなたはそれぞれが陰陽の矛盾を抱えながら、さらには相互に陰陽の引力（求心力）と斥力（遠心力）が闘ぎ合う葛藤の世界が渦巻くこととなる。微妙・巧妙な拮抗した均衡が表面上・表層的には保たれることとなる。がしかし、それはとても不安定であることから、いつ何時、破裂・破滅するかは分からない。その上で、その改善策は次のように考える。分別知の我々の常識や自らの先入観の異状さに気付くこと、そういう意識的な認識を持つことである、すると、同図 b のとおりの、陰陽の鍵を外した先にある統合された「合一」、いわば、物的境界の外れた世界があることに気付くのである。すると、自ずから私とあなたの対峙の現実空間はグラデーション化に自然変化、自動変容するのである。グラデーションだから黒と白とその間の灰色が今世一体となった世界が見えて来ることになり、そこに、優劣や強弱の絶対性は雲散霧消し、対等互啓（恵）精神が育まれることになる。



図－7 a



図－7 b

まさに、一つのもの・ことに対する「正－反／肯定即否定、反－正／否定即肯定」の同時視座である、これを矛盾の自己同一という。そこで、私において、迫って来る一句を言え、と言われた処において浮かぶのが、「信念とは、T P O・時処位に即応の最適解」を見出す心・言・行である。」ということである。

般若心経の神髄は「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」である。同御経を唱えない宗派の人達でさえも知っているだろう「色即是空 空即是色」の意味合いのこと。とりわけ「空」とは何かである。世間一般で言う「空っぽ、何もない状態、真空」では無いのである。維摩経「不二一如」における一如、華嚴経「法界縁起」の究極世界を表現している「一」、そして最先端量子学における「Z P F」という場が「空」なのである。人間が認識する実態（色）は個別体の無限集合体と観るからには、個の存在性は無くなったとする概念である。個性・個別性が剥がれた、執着から離脱した世界である。

(end)